

「当事者として語ること『Black Box Diaries』監督ステートメント」

この作品は、私が性暴力被害を受けた直後から経験してきた出来事をめぐって、社会・制度・メディアの在り方に当事者の視点から光を当てたドキュメンタリーです。

これは日本で起きた出来事であり、日本社会の中で長く語りづらさに包まれてきた問題です。だからこそ、日本のみなさまに見ていただくことに、特別な意味があると感じています。

この10年間、本当にさまざまなことがありました。性暴力という大きく私自身を揺るがした出来事は、その始まりでしかありませんでした。逮捕は直前で止められ、検察にこれまでの証言や証拠の開示を請求しても、手渡された資料はほとんどが黒塗りで、まさに「ブラックボックス」でした。それでも自ら調査し、再度集めた証言など、真実の「かけら」をつないだのが本作です。

『Black Box』(文藝春秋)は、ジャーナリストとして、感情から一步距離を置いて書いた本です。当時の私は、自分の怒りや悲しみを加害者と結びつけたくなかつたし、言葉にならない感情を真正面から見つめる余裕もありませんでした。一方で、「当事者として、サバイバーとして、自分は何を語ることができるのか」という問い合わせ、次第に大きくなっていました。答えの出ない問い合わせながらも、自分自身が「サバイバーの視点から語られた映画」を見たいという思いが、やがてこの作品の原動力になっていきました。ただし、それは自分の内面と向き合い続けることを意味します。その過程は、決してきれいごとではありませんでした。約450時間にわたって、自分のトラウマが記録された映像を編集室で見返すことは、画面に向き合うたびに心の奥をえぐられるような時間でした。それでも、その恐怖も揺れも含めて、一人の人間として監督として映像に刻み直すことが、この作品を作ると決めた私の覚悟でした。

映画には、サバイバーとしては本当は入れたくなかった場面もあります。娘として、母には見せたくない場面もあります。編集当初は、ジャーナリストの視点から「自分だけの主觀で語っていいのか」と何度も躊躇し、できるだけ多角的な視点を意識して、加害者側である山口氏へのインタビューも検討しました。

けれど、他のジャーナリストや監督が、自分自身のストーリーを紡いでいる素晴らしいドキュメンタリー作品に出会い、「自分の言葉で語ってもいいのだ」と背中を押されました。

公の場で性暴力被害を語ることには、常に葛藤がありました。誹謗中傷や脅迫、社会の視線にさらされ続ける孤立感、「性犯罪被害者」としてのみ見られる痛みも常にありました。もし、あのとき逮捕が止められることなく捜査が進んでいたなら、私は語らない人生を選んでいたかもしれません、と振り返ることもあります。

それでも、問題は可視化されなければ改善されません。助けを求められる社会であってほしい。正義がきちんと機能する社会であってほしい。その思いから、私は「言葉」と同じくらい、「映像」の力を信じています。

この作品の背景には、「映像証拠」とどう向き合うかという問い合わせも常にありました。性暴力を受けたあの夜、私はベッドに顔を押しつけられ、息ができず、「ここで人生が終わるのだ」と覚悟しました。あの身体感覚は今も残っています。

しかし、その被害について語れる第三者も、当時の現場を捉えたカメラもありませんでした(被害直後、意識のないまま被害を受けている自分の姿が撮影されていたのではないかという恐怖がありました。実際にはそのような映像は見つからず、そのことには今も深く安堵しています。)そうした中で、ホテル入口の防犯カメラだけが、意識のない私がタクシーから引っ張られホテルに連

れて行かれる姿を映しており、被害の一部を唯一視覚的に示すものでした。

この映像があったからこそ、警察は「事件性がある」と動きました。これまで、性暴力被害について証言をするとき、警察や、後にはネット上でも、繰り返し被害の有無が疑わされてきました。映像や記録は、被害者にとって唯一、声に輪郭を与える盾になるのだと痛感しました。

一方で、その防犯カメラ映像にたどり着く過程は、決して容易ではありませんでした。ホテルからは「裁判所の命令がなければ渡せない」と言われ、映像処理費用として40万円以上を要求されました。被害後に仕事がままならず、生活が困難になっていた私には、大きな負担でした。また、映像を裁判以外には使わないという誓約書を、弁護士と連名で提出せざるをえませんでした。

本来、防犯カメラは抑止と再発防止のためのものですが、実際には、被害が起きたときにこそ、その意味を持つ現実があります。二度と同じことを繰り返さないために、ホテルを含む関係者が、迷いなく協力できる社会であってほしいという願いも、この映画には込められています。

映像証拠の強さを知った痛みもありました。2019年12月、第一審の勝訴判決が出た直後、裁判当事者双方ともに「裁判以外には出さない」としていたホテルの防犯カメラ映像のうち、ホテルから私が出ていく一部だけが切り取られ、ネットに流出しました。

それは何十万回も再生され、「普通に歩いて出てきているじゃないか」「レイプ被害者には見えない」といった言葉とともに拡散され、誹謗中傷はさらに悪化し、判決について多くの疑問の声が溢れました。映像証拠の力は、人を守る盾にもなれば、文脈から切り取られたときに人を深く傷つける刃にもなりうる。そのことも、私はこの10年の中で、痛みを伴いながら学びました。

私は完璧ではありません。この10年、たくさんの迷いや失敗、そして説明しきれなかったことも抱えてきました。被害者としての顔もあれば、誰かにはジャーナリストとして、また別の誰かには監督として映っているかもしれません。そのどれもが、たしかに私の一部です。

けれど、この作品には、そのすべてを経験した「ひとりの人」として向き合い、監督として臨みました。ジャーナリストとしての報道ではなく、当事者である私が、自分の物語を引き受けて編み直したドキュメンタリーです。

この映画もまた、決して完璧ではありません。それでも、自分の体験から出発しながら、一人の人間として、一人の作り手として、見てきたこと、聞いてきたこと、調べてきたこと、そして感じたことを、映像として束ねたいと思い、監督としてこの作品を世に出すことを選びました。

映画を見る方々に、一つだけお願いがあります。

どうか一度、私の名前を忘れて、身近な人の出来事として観てください。もし同じことが、あなたや大切な人に起きたなら、何を信じ、どう動くのか。

その想像力と、観終えたあとに誰かと交わされる小さな一言が、沈黙をほどき、次の誰かを守り、社会を少しずつ動かす力になると信じています。

この映画が少しでも多くの人に届き、社会の中にあるさまざま「ブラックボックス」が開かれていくことを、心から願っています。

そして、性暴力の被害を受けた人たちが、証拠や声を軽んじられることなく、安心して助けを求められる社会に近づく一歩となることを願っています。

2025年12月12日

伊藤詩織